

# 延慶本『平家物語』について

萩原 義雄

はじめに

『平家物語』という作品名を聞いて、巻第一冒頭書き出しの「祇園精舎乃鐘の聲、諸行無常の響あり。娑羅雙樹の花乃色、盛者必衰のことはりをあらハす。おこれる人も久しからず、只春乃夜の夢乃ごとし。……」を聞いたことがない人はいまい。琵琶法師による「平曲」という語りの世界として世に知られ、

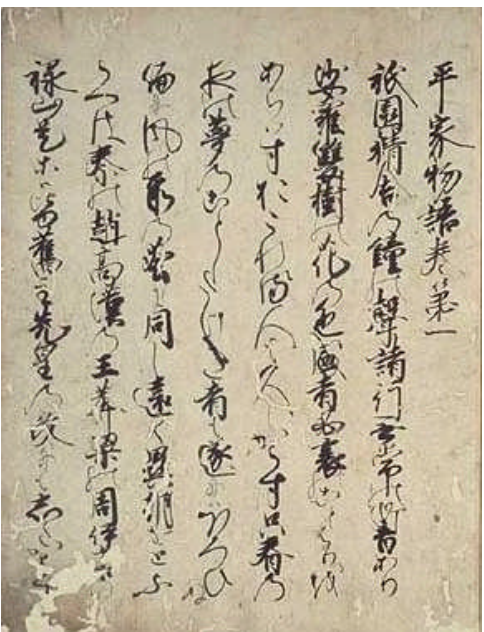
やがては書物の形態となつて読み本系そして流布本へと傾倒していく軍記物語という作品群に位置する。この資料として、[「龍谷大学学術情報センター」所蔵](#)という漢字平仮名文の作品が最も良く目にする資料であろう。

○漢字表記

祇園精舎／鐘／聲／諸行無常／響／娑羅雙樹／花／色／盛者必衰／人／久／只／春／夜／夢／

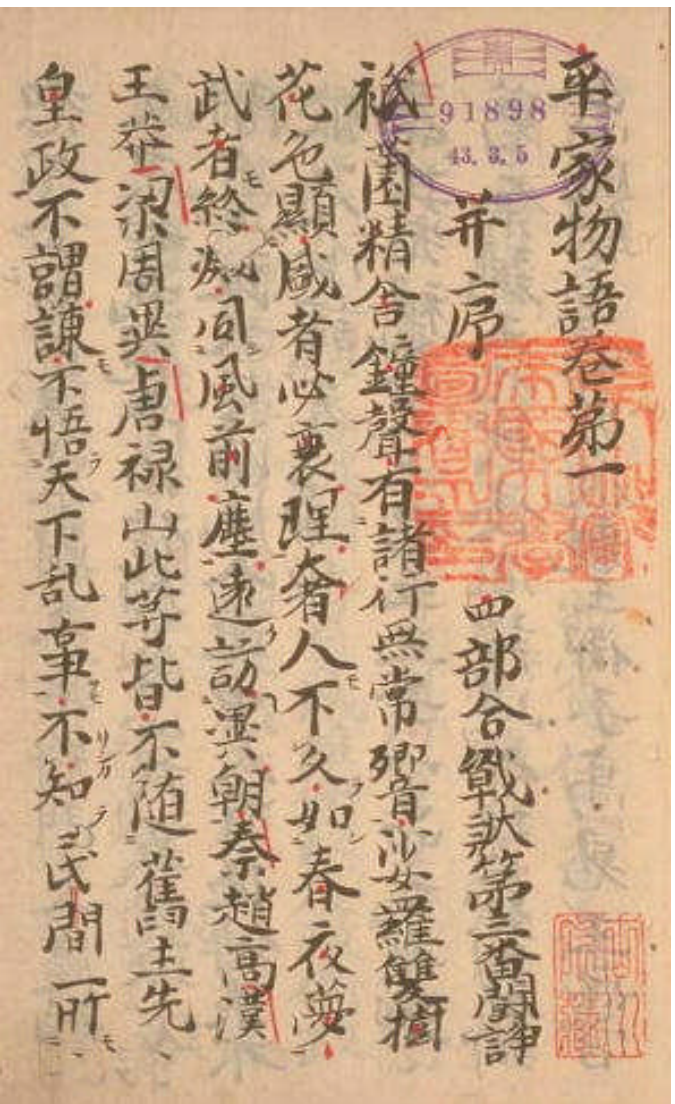
○仮名表記

乃／の／のあり／の／乃／の／こと／はり／を／あらハす／おこれる／も／：しから／す／乃／の／乃／ことし／



漢字表記は、和語及び漢語両用に使われていることがこの資料から分かる。

これに対し、真名本と呼ばれる系統の『平家物語』が知られる。真名本『平家物語』は、国語史資料として多くのことは事象を提供してくれている。諸本として前田家尊経閣文庫蔵熱田本『平家物語』、彰考館南都本『平家物語』、京都大学蔵平松家本『平家物語』等が知られる。



※伴信友翁蔵書、古本『平家物語』巻第一「四部合戦状第三番鬪諍／并序」の資料

祇園精舎



平家物語第一

祇園精舎鐘聲諸行無常若響有沙羅雙樹

※京都大学蔵平松家本『平家物語』  
卷第一、漢字片仮名交じり文  
祇園精舎

之花色盛者必衰之理顯奢之人不久只眷  
夜如夢猛者終亡又偏風之塵同遠異朝訪  
秦趙高漢王莽梁周黑唐祿山此等皆鳥  
主先王政不隨與極諫不思入天下之亂事不  
昭民間之愁所知士歿者不交亡者共也近窺本  
朝承平將門天慶仇交康和之義親平治承平  
信賴奢心猛更見社有士歿共親六波羅之令違前  
太政大臣平朝臣清盛公申人之消息傳表社心者

その一つである大東急記念文庫蔵延慶本『平家物語』(全六卷十二帖)を基盤にそのことばの特徴を

学習してみることにしたい。

平家物語第一本

祇園精舎鐘聲諸行無常若響有沙羅雙樹  
花色盛者必衰之理顯奢之人不久只眷  
夜如夢猛者終亡又偏風之塵同遠異朝訪  
秦趙高漢王莽梁周黑唐祿山此等皆鳥  
主先王政不隨與極諫不思入天下之亂事不  
昭民間之愁所知士歿者不交亡者共也近窺本  
朝承平將門天慶仇交康和之義親平治承平  
信賴奢心猛更見社有士歿共親六波羅之令違前  
太政大臣平朝臣清盛公申人之消息傳表社心者



○まず、覺一本の平仮名表記部分をカタカナ小書きにして記載していることが確認できる。

次に「**こと**はり」↓「**理**」／「**あら**はす」↓「**頭**」／「**おこ**れる」↓「**驕**」と和語仮名表記のこ  
とばを漢字表記に改めていることが見て取れる。

三番目として、「必衰」「滅」「訪」「秦趙高」「漢王莽」「梁周異」「唐祿山」「舊主」「先皇」  
「**務**」「**不**從カハ」「民間愁」「承平将門」「純友」「康和義親」「信頼」「驕」「猛」「取々ニコソ」  
「**遂**」「**滅**ニキ」「**詐**ト」「**哉**」「**王麗**ナル」「**猶**」「**況**」「**争**」「**慎**」のような漢字表記語に傍訓が所々  
に見えている。

四番目に、漢字の傍らに声点を付載する。「秦」に「平声」「趙」に「去声」。「舊」に「去声」。

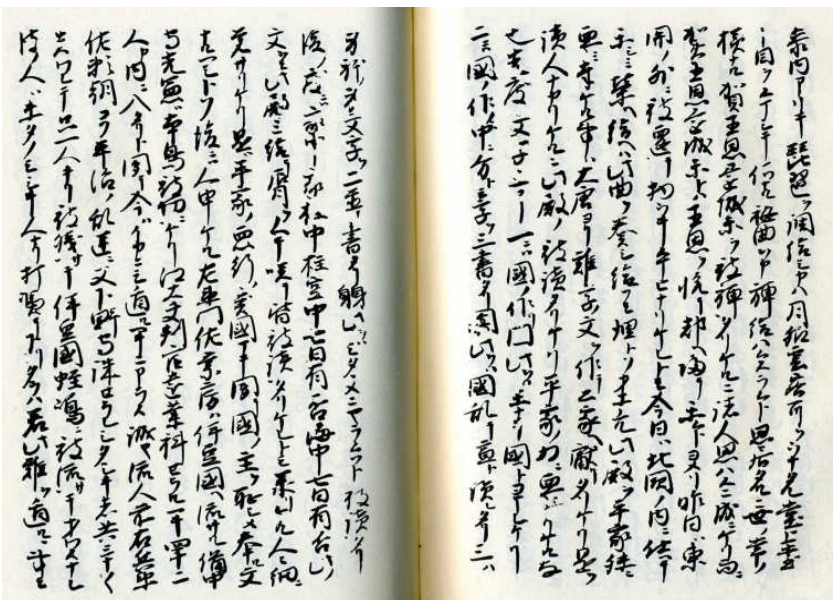
延慶本の文字研究資料については、『漢字百科大事典』（明治書院、平成八年刊）に、白百合女子大学  
教授の山本真吾さんが一〇『平家物語』の異体字(三二七〜三四六頁)に正体字と異体字とを対比させ、  
且つ、認定の所據として、『干祿字書』（杉本つとむ『改訂増補漢字入門』『干祿字書』とその考察』影印  
資料付(昭和六十年、早稲田大学出版部刊)・観智院本『類聚名義抄』（天理図書館善本叢書と書之部第  
三十二巻、昭和五十一年、八木書店刊及び正宗敦夫編纂校訂、風間書房刊)などを以て記載している。  
これに見えない異体字表記として、「聞」文字表記があり、私が駒澤國文第四十二号に「延慶本『平家  
物語』における「聞」文字仕様について」(一八五頁〜二三四頁)と題して、平成十七年三月に発表し  
ているので参照されたい。

## 延慶本『平家物語』の先行資料

- 0, 延慶本平家物語傍訓索引／出版, [1961. 2]／形態事項: 112 p; 29 cm／B1和913. 43/35 **禁帯出**
- 1, 平家物語について: 応永書写延慶本／富倉徳次郎講述／出版: 東京: 大東急記念文庫, 1961. 5  
／形態事項: 24 p, 図版2枚: 21 cm／本学図書館請求番号H031/67-52
- 2, 平家物語: 應永書寫延慶本／吉澤義則校註／出版: 東京: 白帝社, 1961. 7／形態事項: 1092  
p; 22 cm／国文備付H612. 3/109
- 3, 平家物語: 応永書写延慶本／吉沢義則校註／出版: 東京: 白帝社, 1973. 1／形態事項: 1092  
p; 22 cm／注記: 久原文庫蔵応永書写を翻刻したもの／注記: 昭和10年刊の再版／H612. 3/109 A・B
- 4, 延慶本平家物語／出版: 東京: 古典研究会, 1964-1965／形態事項: 四冊: 22 cm／巻次等:  
第一巻 巻次等: 第二巻 巻次等: 第三巻 巻次等: 別冊付録／その他の標題: VT: 平家物語: 延慶本注  
記: 大東急記念文庫所蔵 影印版／注記: 別冊付録: 延慶本平家物語解説・対校正表(伊地知鉄男編著)  
／H612. 3/78-1 A・B・C・国文備付
- 5, 平家物語: 延慶本／出版・頒布事項: 「東京」: 大東急記念文庫／出版: 東京: 汲古書院(発売)  
, 1982-1983／形態事項: 六冊: 27 cm／H612. 3/181-1〜6
- 6, 平家物語: 延慶本: 重要文化財／島津忠夫責任編集／出版: 「東京」: 大東急記念文庫／: 汲  
古書院(発売), 2006. 5-／形態事項: 冊: 27 cm／C4・081/87-20/1
- 7, 校訂延慶本平家物語／栃木孝惟, 谷口耕一編／出版: 東京: 汲古書院, 2000. 3-／形態事項:  
冊: 21 cm
- 8, 延慶本平家物語／北原保雄, 小川栄一編／出版: 東京: 勉誠社, 1990. 6-1996. 2／形態事項:  
四冊: 挿図: 22 cm／4冊913. 43/64-1/1A
- 9, 延慶本平家物語全注釈／延慶本注釈の会編／出版: 東京: 汲古書院, 2005. 5-／形態事項: 冊







この中世の国語資料である延慶本『平家物語』は、学問僧侶の手になる資料であり、複数の書写者によって書記されている。この点に注目し、根来寺を中核とした本書の書記集団の学識力を知る上からも、一つ一つの語について他本と照らし合わせながら考察することがこれからの重要な課題である。意外と書写状況を見過ごしてしまっている活字の翻刻資料を知らねば成るまい。たとえば、「國」文字を凡て「国」にしたり、「讀」文字を「読」にしたりである。この資料中には、「佛」と「仏」と両用文字が用いられたりしているから統べて同じ表記することで見逃してしまう事柄もあるのではないか。

《追記》本学国文科の櫻井陽子さんは、「延慶本平家物語（応永書写本）の本文改編についての一考察―願立説話より―」「国語と国文学」二〇〇二年三月刊」で、延慶年間に書写された本文そのままではなく、延慶から応永の間に成る覺一本の本文を組み込んでいることを既に指摘されている。

《補訂追加》

① 疊字語の表現

○「いかに／＼、何事にてもとく／＼」と宣ひければ、義王は、参るほどにてはさてしも有るべきならねばと思ひて、今様の上手にて有りければ、「仏も昔は凡夫なり我等も終には仏なり。何れも三身仏性具せる身をへだつるのみこそ悲しけれ」と、**押し返し／＼**、三反までこそ歌ひけれ。〔第一本37ウ④〕

※『梁塵秘抄』卷二―三二傍証歌を所載する。

○朝夕は南無慚愧懺悔六根罪障と懺悔し、心に心を警て、僅に半日に行き帰る道なれど、同處をゆ**行帰り**／＼、白波さゞなみ凌ぎつゝ、漫々たる蒼海にたゞよひ、塩風波間のこりの水、何度と云数を不知一。浦路濱路を行時は、鹿の瀬、藤代、かぶら坂、十条、高原、滝の尻とも観念し、石岸いはほ高くして、青苔あつくむし、万木枝をまじへて、舊草道をふさげる谷川もあり。〔第一末85オ②③〕

○院中の人々、兵具をとゝのへ軍兵を召し集めらるる事をば、知食されて候ふやらむ」と申しければ、「いさ、それは山の大衆を責めらるべしとこそ承れ」と、いと事もなげに宣ひければ、「其の儀にては候はず」とて、日来月来、新大納言を始めとして、俊寛が鹿谷の山庄にて、**よりあひ／＼**内議支度しける事、「其は、とこそ申し候ひしか、かくこそ申し候ひしか」と人の吉き事云ひたるをば我申したりしと云ひ、我悪口したりしをば人の申したるに語りなし、五十端の布の事をば一端も云ひ出ださず、有りのままには指し過ぎて、やう／＼さま／＼の事ども取り付けて細かく申しければ、入道大きに驚きて宣ひけるは、「保元平治より以来、君の御為に命を捨つる事、既に度々也。人々いかに申すとも、きみ君にて渡らせ給はば、争でか入道をば子々孫々までも捨てさせ給ふべき。恐れながら、君もくやしくこそ渡らせ給はむずらめ。抑も此の事は、院は一定知ろし食されたるか」と宣ひければ、「子細にや及び候ふ。大納言の軍兵催され候ひしも、院宣とてこそ催され候ひしか」。〔第一末14ウ⑥〕

○入道、貞能を召して、「謀叛の者共の有んなるぞ。侍共きと召し集めよ。一家の人々にも、各ふれ申

せ」と宣ひければ、面々に使をはしらかして此の由を申すに、凡そいづれも騒ぎあひて、我先にと馳せ集まる。「第一末15ウ⑤」

○是をこそ過分とは申すべけれ。侍品の者の受領・檢非違使・鞠負尉になる事は傍例なきに非ず。なにかは過分なるべき。入道こそ過分よ、と居長高になりて、詞もたばはず散々に申しければ、入道余りに怒りて物も宣はず。「第一末20ウ⑥」

○祭文讀畢りにければ、いつより信心肝に銘じ、五躰に汗いよだちて、権現金剛童子の御影嚮、忽にある心地して、山風すごく吹きをろし、木々の梢もさだかならず、木の葉かつちりけるに、ならの葉の二、康頼入道が膝に散りかゝりたりけるが、虫のくひたる姿にて、あやしかりければ、入道是を取て打返しよく／＼みるに、文字の躰にぞ見なひたる。「卷二、第一末91ウ・40頁」

○宗との者共は、栗濱の御崎に有ける船共にはいのり／＼、安房の方へぞ趣ける。大介が輿は雑色共の昇たりけるが、敵近く責かゝりければ、輿をも捨て、逃にけり。近く付仕ける女一人ぞ付たりける。「第二末73才⑥」

○實語教一卷、是即山僧經也。仍陀羅尼品云く、奄、山法師、はらぐろ／＼、よくぶか／＼、はぢなや、そはか」とぞ書たりける。「第二卷・第二中49才・317頁」

## ② 《地名国名》

○聖武天皇の書置せ給ける東大寺の碑文に云、「吾寺興復、天下興復。吾寺衰微、天下衰微」と云云。「第二末114ウ」

○縦一丈二丈の木なりとも、油黄嶋にて漫々たる海に入れたらむが、新羅、高麗、百濟、鷄旦へもゆられゆかで、安藝國、又新宮までよるべしやは。「卷二、第一末94ウ・414頁⑧」※朝鮮半島の諸國名を列挙するが、「鷄旦」は、「契丹」のこと歟。

## ③ 藤原公任選『和漢朗詠集』引用詩歌

不是花中偏愛菊。此花開後更無花。元「上卷、菊・元積」

○ 其中二菊ノ詩二、「不是花中偏愛一レ菊。此花開尽更無レ花」ト作テ侍リシヲ、人皆『此花開後』ト詠ジ侍リ。「第二中79才④」

④ 漢籍『文選』引用句「卷四一書上、李少卿「答蘇武書」

○ 「蕭樊、<sup>ハラス</sup> 韓彭に囚はれて、<sup>シラ</sup> 殖醯されたり。晁錯二、<sup>リク</sup> 戮を受け、<sup>シウキ</sup> 周魏、<sup>ツミ</sup> 辜せらる。其の余、命を佐け、功を立つる士、賈誼<sup>ケイ</sup> 亜夫の徒、皆信に命世の才なり。将相の具へを抱けり。而るに少人の讒を受け、並びに禍敗の憂へを受く」と云へり。「第一末23ウ②」

## 《参考研究資料》

『延慶本平家物語』大東急記念文庫蔵・影印「汲古書院刊」

『延慶本平家物語』本文篇上下二冊、北原保雄・小川栄一編「勉誠出版刊」

『延慶本平家物語の日本語史的研究』小川栄一著「勉誠出版刊」